

特別賞 丸善雄松堂賞

『コンビニ人間』 村田 沙耶香著

情報コミュニケーション学部 情報コミュニケーション学科 3 年 松本 皓士郎

今日、社会との軋轢から生きづらさを感じる人は少なくない。多くの人が「個」の尊重を望んでいる一方、実際に、社会は「個」をそう簡単には受け入れてくれない。世間の常識から大きく外れていればなおさらである。本書は、そのような社会と「個」の軋轢を書いた物語である。

主人公の古倉恵子は、18 年間コンビニでアルバイトしている。彼女は幼い頃から他者とは異なる感性の持ち主であったため、周りとうまく付き合うことができなかった。心の底から納得できていなかったが、このままではダメだと感じ始め、周りとなるべく変わらないように自分を演じて見せるようになる。こうして、波を立てることなく、社会にも溶け込んでいるように見せることができるようになった。しかし、転機が訪れる。コンビニにアルバイトとして入ってきた男と出会いである。男は、恵子のように社会に迎合しようとはせず、衝突を繰り返していた。そこで二人は、示し合わせてお互いを利用しあうことによって周りの視線を欺き、社会に迎合するふりをしたのである。

本書の随所から、社会から受けるプレッシャーの強さを感じることができる。端的に言えばこの小説は、「社会」と表面化した「個」は共存できないという葛藤を今日の世論に対して訴えている。男は「このようであるべきだ」、女は「こうであるべきだ」というようなレッテルを張られている感じたことがある人も多いのではないだろうか。昔に比べれば現代は直接そう言われたり、感じたりすることは少ないかもしれない。しかし、直接的ではなくなっただけでむしろ、今の方が暗黙の了解といったような逃げることでできない見えない力が働いているように思える。それを端的に今の世に伝えたのが本書である。一つの側面の「個」と社会との衝突を描いているが、軋轢は決して一筋縄では解けない。各人が心の中に抱える不和。そのような衝突を本書は、読者に自身の中にある不和との付き合い方を改めて考える機会を与えてくれる本であろう。また、どこかで生きづらさを感じているなら本書はその人に寄り添って、励まし、進むべき方向を示してくれるであろう。社会では共存できない「個」に対して、共感という感情を本書に抱くことができると私は思っている。